

# ごりょう 五霊遺跡

— 河内郡上三川町東<sup>ひがしふざかし</sup>汗地内—

五霊遺跡は、上三川町の北東部、鬼怒川西岸の自然堤防上にあります。発掘調査は、北関東自動車道建設に先立ち、平成14・15年に実施いたしました。調査した場所は、宇都宮上三川インターチェンジから北関東自動車道を東に4.5 kmほど走った道路の下になります。

発掘調査では、今からおおよそ1,400～1,100年前の竪穴住居跡23軒や井戸跡2基などが発見され、鬼怒川が作った肥沃<sup>ひよく</sup>な低地を生産基盤とした古墳時代後期から平安時代の集落跡があったことが明らかになりました。

古墳時代後期の竪穴住居跡は、一辺が10 mを越える大型のものから、4 mに満たない小型のものまで様々な規模のものがあります。これらの住居跡からは、たくさんの坏<sup>つき</sup>や壺<sup>つぼ</sup>・甕<sup>かめ</sup>・甑<sup>こしき</sup>などの土器のほか、砥石<sup>といし</sup>や編み物石<sup>むしろ</sup>（蒔<sup>おもり</sup>編みの錘<sup>ぼうすいしゃ</sup>）・紡錘車<sup>まがたま</sup>、勾玉などの祭祀に関連する遺物などが出土しました。特に、古墳から出土することが多い須恵器の提瓶<sup>ていへい</sup>（携帯用の液体貯蔵容器＝現在の水筒のようなもの）や、県内では出土例が少ない須恵器の捏ね鉢<sup>こ</sup>などは注目されます。





北西上空から見た五霊遺跡



大型竪穴住居跡調査風景



# 大型竪穴住居跡と祭祀遺物

五霊遺跡の調査区中央からは、古墳時代後期（約1,400年前）の2軒の大型竪穴住居跡が南北に並んで発見されました。一辺10mを超えるもので、通常の竪穴住居の4倍の広さがあります。一般の竪穴住居跡同様、北壁中央にカマドと隣接して貯蔵穴が確認されていますが、柱穴は7～9本で、「田」の字に配置され、床面の中央に柱穴があることが特徴的です。

両住居からは、<sup>つき</sup>坏や<sup>かめ</sup>甕・<sup>こしき</sup>甑などの日常使われる土器のほか、他の住居からは出土していない<sup>まがたま</sup>勾玉・<sup>うすだま</sup>臼玉・<sup>てづく</sup>手捏ね土器・<sup>どせいもぞうきょう</sup>土製模造鏡などの祭祀用品が出土しています。特に勾玉は、その形状から住居が廃絶した時期より100年ほど前に作られたもので、壊れた勾玉の<sup>あな</sup>孔が磨り減っていることなどから、代々受け継がれ使用された貴重品であったと考えられます。

五霊遺跡の大型竪穴住居跡は、大きさはもちろんのこと、古墳時代後期の集落の<sup>くうかんち</sup>空閑地に建てられていること、<sup>じょうか</sup>浄化・<sup>へいそくてき</sup>閉塞的儀礼が予想される埋め戻しが認められること、さらには祭祀に関連する遺物が出土していることなどから、特別な役割があった建物跡と考えられます。